

第2部 美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する実践的検証

第1章 言語活動を介して得られる質感に関する授業の構築

質感は、言語との関わりによって、不明瞭だった抽象的なイメージを具体化させ、的確な表現へとつながる。そこには、対象を感覚的に捉えるだけではなく、生徒一人一人の深層意識が関わりを持ち、美術表現へと生成させ撮影対象を切りとるだけではない個の深層意識に迫った表現の獲得や、他者との質感の共有が存在する。擬態語を介在させることは、そこから発生する質感の感受によって想像力を働かせ、視覚のみに頼るのではなく、触覚、聴覚といった他の感覚器官も創作活動を支える。さらに、活動はグループで行うことで、会話が生じる。つまり、擬態語より撮影者の唯一無二の感覚が対象を捉え、言語活動を介し共通認識を持って作品化される。

本研究では、デジタルカメラを介して行われる質感の感受に重点が置かれ、感受した質感は、他者との共有化が自身の感覚との差異を生み、その関わりによって質の伴った表現が生成されること、そして、その一連の行為を支える媒体として言語があると捉える。言語活動は、不明瞭な事物を質感の差異から認識し、明確化する。実践授業において、この一連の流れを構築する。

第1節 基礎理論より活動への展開

基礎理論では、美術教育における「言語」「質感」「写真」についてそれぞれ論じた。そこで、この基礎理論を土台とし、授業観察と実践授業を行う。活動を行う対象は、小学校と中学校とする。授業観察は、小学校第2学年を対象に行う。授業実践は、小学校では、第1学年と第5学年を対象とし、中学校では、第1学年を対象とする。実践授業の内容は、以下の3点を基に構築する。①美術教育と言語との関連については、美術教育において言語としての擬態語を介在させることは、個人の深層意識や感覚とのつながりをつくる。②

美術教育と質感との関係においては、擬態語を介在させることで質感の取捨選択による感受が可能となる。③美術教育における写真という表現媒体を活用することの意味については、言語を介することで質感の感受を獲得させることにおいて有効である。

授業実践を行う対象学年は、言語の認識能力の違いによって擬態語や写真撮影にどのような差が生まれるのか、比較する必要があることを踏まえ、決定した。そこで、言葉の学習がより少ない小学校第1学年の児童と、学習に対して自律的に行える学年として小学校第5学年を選んだ。そして、中学校での学年選択では、中学生という新たな学校生活を送り始めた中学校第1学年の生徒を対象とした。中学校第1学年の生徒は、新たな部活動や学校生活によって、新鮮な感覚を得ている、と想定したためである。

授業観察と授業実践は、以下の内容を行う。

授業実践1として、小学校第2学年において、デジタルカメラを媒介させた課題の授業観察を行う。この際、①児童と言語との関係 ②制作過程における児童の思考、経験、質的世界に関すること ③デジタルカメラと児童との関係、の3つの観点で授業観察を行う。

授業実践2として、授業実践1の授業観察で得た結果と基礎理論を基に、①言語 ②質感 ③デジタルカメラの視点で、小学校第1学年を対象とした授業構築を行う。

授業実践3として、授業実践2の小学校での実践分析と結果、基礎理論を基に、①言語 ②質感 ③デジタルカメラの視点から、中学校第1学年での授業構築を行う。その際、中学校第1学年の学習レベルに合わせ、小学校で行った実践を発展させた内容とする。

授業実践4として、授業実践3での実践分析と結果、基礎理論を基に、①言語 ②質感 ③デジタルカメラの視点から、授業構築を行う。授業実践3での実践授業を経験した生徒が、その経験を基に発展的に行える授業内容とする。そのため、同学年を対象とする。

表 5 授業実践の展開

授業実践の展開				
展開	授業実践 1 (授業観察)	授業実践 2	授業実践 3	授業実践 4
対象学年	小学校第 2 学年	小学校第 1 学年 小学校第 5 学年	中学校第 1 学年	中学校第 1 学年
授業内容	デジタルカメラによる撮影を行い、写真要素を利用した授業実践の観察。	デジタルカメラによる写真撮影。擬態語から感じる質感を感受し、デジタルカメラで撮影を行う。	擬態語から感じる質感を感受し、デジタルカメラで撮影を行う。撮影した写真を印刷し、コラージュを行い再構築し作品化する。	「学校の色」を表現することをテーマとする。第三段階と同様、擬態語から得られる質感の感受を、撮影対象と出会う条件とする。
分析の観点	授業観察。デジタルカメラと生徒との関係进行分析する。	小学校におけるデジタルカメラを利用した授業実践。擬態語から感じる質感を感受し、撮影する行為と過程を分析する。	中学校におけるデジタルカメラを利用した授業実践。擬態語から感じる質感を感受し、撮影する行為と過程、さらに撮影した写真を印刷し、コラージュを行い再構築し作品化することを分析する。	中学校におけるデジタルカメラを利用した授業実践。授業実践 3 を基礎とし、発展型の授業とする。擬態語による質感の感受が、別な主題と合わさった際、どのような役割を示すのか、分析する。

第 2 節 活動の概観

授業実践 1 は、平成 22 年 12 月に実施する。授業観察の題材名は「ゆめのなかへ」である。授業対象は、小学校第 2 学年である。児童が想像する空想の生き物が、目の前に現れた時の反応を身体表現し、そのポーズを教諭が写真撮影する。その写真と絵画表現とを合わせ作品化する内容となる。

授業実践 2 は、平成 23 年 3 月に実施する。授業実践の題材名は「ことばをうつそう」である。授業対象は、小学校第 1 学年である。実践内容は、擬態語を介して質感を感受し、デジタルカメラを使用して、撮影を行う。活動はグループで行う。撮影した写真を用いて鑑賞学習を行う。

授業実践 3 は、平成 23 年 7 月に実施する。授業実践の題材名は「ことばの世界を写そう」である。授業対象は、中学校第 1 学年である。実践内容は、擬態語を介して質感を感受し、デジタルカメラを使用して、撮影を行う。活動はグループで行う。さらに、撮影した数枚の写真をはさみかッターで切り貼りし、擬態語の表す質感へ創造することを行う。切り貼りしたものを再度撮影し、写真作品とする。撮影した写真を用いて鑑賞学習を行う。

授業実践 4 は、平成 24 年 2 月に実施する。授業実践の題材名は「学校って何色？」である。授業対象は、中学校第 1 学年である。実践内容は、擬態語を介して質感を感受し、デジタルカメラを使用して、撮影を行う。活動はグループで行う。さらに、撮影した 3 枚の写真それぞれを 6 分割し、その中から、9 枚選択し切り貼りする。切り貼りしたものを再度撮影し、写真作品とする。撮影した写真を用いて鑑賞学習を行う。

デジタルカメラには、一台ごとにナンバーを付け識別している。グループに一台貸し出す際、学習ノートにこのナンバーを書かせ、データがどのグループのものか解らなくなることを避ける。使用する記録メディアの SD カードにも同じナンバーを振り、混乱を避けるように配慮する。本研究で使用するデジタルカメラは、バッテリーではなく単三乾電池を使用している。その使用理由としては、電池量の確認はこまめに行う必要があるが、もし、電池残量が減り撮影ができなくなった時、容易に入手可能な電池であれば、対応することができる点が上げられる。(図 9 参照)

デジタルカメラに付くストラップは、必ず手に通し、落下による破損・故障を防ぐように指導する。

デジタルカメラの最大の特徴は、2 点上げられる。一つは、SD カード等の記録メディア

によって撮影可能枚数がフィルムカメラに比べ大幅に増えた点が上げられる。さらに、撮影と消去を繰り返し行うことが可能であり、その場で撮影者自身の判断において選択可能となった。このことによって、撮影者は、撮影にかかる費用を抑えることが可能となり、 unnecessary プリントを避けることが可能となった。

もう一つは、カメラ背面に設置されたモニターである。フィルムカメラでは、撮影を行うことと、その撮影した内容を確認することには時間差が生じていた。しかし、デジタルカメラでは、このモニターの存在によって撮影後すぐにその場で撮影した内容を確認することが可能となった。このことで得たことは、自身のイメージ通りに撮影ができたかを確認することで、その内容を確認しながら更にどうするかを考えながら次へと展開することである。瞬時に確認することで得られる効果は、質感の感受をより具体的に実感しながら制作ができ、本研究においては有効的と言える。

以上の二つは、デジタルカメラの特徴であり、フィルムカメラとの最大の違いであると言える。つまり、この二つの機能によって、フィルムカメラにあった限られた枚数での撮影や、プリントするまでその像を得られないといった時間差によって発生する創造の価値が失われたとも言える。しかし、デジタルカメラであっても、撮影後すぐに確認しないことや、枚数を制限することは可能であるため、意図的にフィルムカメラと同じ状況をつくることは可能である。

フィルムカメラとデジタルカメラとの性質の違いによって、写真<カメラ>の利用の幅が広がったことは確かである。しかし、カメラの根本としては、同じである。写真による身体へのアプローチは、カメラを持つことで発生する視点の絞り込みが上げられる。カメラを持ち撮影を行うという姿勢は、何を撮影しようかと探すことが始まりとなる。一瞬で撮影が可能であるコンパクトカメラでは、多くの時間を、視点を定めるために対象を探す行為に充てていると言える。構図、角度、内容、意味などの様々な要因は、自身のもつ経験とともに一枚の写真へと落とし込まれていく。プリントされた写真は、撮影時の記憶とともに存在し、自身にとっての価値として形づくられる。

学校教育におけるデジタルカメラの活用は、写真撮影によって発生する撮影対象と自身との心の距離にあると考えている。何かを捉えるという行為は、意図しなければ実現できないと思われる。それは、撮影環境において対象の存在を浮き彫りにし、そのことを感受する。その際、質感を得て実感することで、紙に印刷された写真が自分にとって美的価値を生むこととなる。

体験の伴った写真であることは、目には見えない事実である。環境を体感し、状況において判断し自身の視点を構築する。そして、意味・目的と総合し自身の表現として提示する。実感が伴った撮影行為を更に色濃く、そして明確にするために、本授業実践では、直接的体験と言葉〈擬態語〉とを合わせ利用する。

	<p>ナンバーとストラップの付いたデジタルカメラ</p>
	<p>4人一組としてグループとなり、デジタルカメラを一台使用できるようにする。</p>
	<p>デジタルカメラの特徴となるモニター。</p>

図9 授業実践で使用するデジタルカメラ

第1章のまとめ

第1章では、第1部の美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する基礎理論の研究成果から、言語活動を介して得られる質感に関する授業の構築を行った。その具体として、第1節では、基礎理論より活動への展開を示した。基礎理論では、言語<擬態語>が質感とつながることにより、個々人の深層意識に触れ、作品に質を生むことを論じた。さらに、この流れに適した表現媒体としてデジタルカメラの使用を示した。そこで、この基礎理論を基に授業実践の方法を構築した。第2節では、授業実践としての活動の概観を示した。言語活動（擬態語）を介して得られる深層意識、質感は、他者とのイメージの共有によって、その違いを認識する。意見交換が個々人の内的世界を表出し、デジタルカメラはその意識を定着させる役割を担っていたことを示した。

第2章 小学校における授業実践とその分析

第1節 デジタルカメラを用いた小学校における図画工作の授業実践1（授業観察）

A 授業観察の目的と授業の概要

写真媒体を利用した授業を観察するために、G 小学校において、授業のビデオ記録を行った。授業は、小学校第2学年を対象にした写真を利用したもので、主題は、「ゆめのなかへ」である。それぞれが想像する空想の生き物が、目の前に現れた時の反応を身体表現し、そのポーズを教諭が写真撮影するといった内容である。

児童の写真媒体との関わり合いから、言語に注目し授業分析を行った。分析方法としては、記録した動画をもとに、行為、発話を分析し児童の体験と言語との関わりについて考察した。この授業観察によって、言語と経験とのつながりに着目することとなる。

授業の概要は次の通りである。

- 題材名：「ゆめのなかへ」
- 実施年月：平成22年12月
- 対象：小学校第2学年
- 人数：男子女子合計24名
- 表現媒体：写真
- 授業者：G小学校教諭

B 授業実践の計画

図画工作、美術での経験は、日常生活でも継続され、日常生活での経験が図画工作、美術の授業に影響を与えるものである。思考・判断し表現することや、生涯にわたり美術との関わりを持つためには、日常生活における経験が作品を形づくる一つの要因であり、反対に、授業での経験が日常生活を形づくるものでなければならない。この経験が、生涯にわたって美術との関わりを持つための基盤を築くことになると考えている。本授業は、そ

のことが言語活動を通して現れた実践となっている。

本授業は、先に述べたように小学校第2学年を対象にした写真を利用した授業で、主題は、「ゆめのなかへ」である。それぞれが想像する空想の生き物が、目の前に現れた時の反応を身体表現し、そのポーズを教諭が写真撮影するといった内容となる。自身の写った全身の切り抜き写真と自らつくった空想の生き物(絵の具の塗ってある紙によるコラージュ)を一つの画面に構成し、背景を描く作品となっている。条件として、自分より大きな生き物であることが伝えられた。

授業の経過は、次の通りである。

- ① 「ゆめのなかへ」を説明する。
- ② 空想の生き物をイメージする。
- ③ 頭のなかで描いた生き物と出会った時の反応を、身体を使って表現する。
- ④ ③の身体表現を教諭が一人一人撮影する。
- ⑤ 想像した生き物をコラージュによって表現する。(画用紙に絵の具で模様や色面をつくったものを利用)
- ⑥ 印刷され、人物の部分のみ切り取られた写真を目にする。
- ⑦ 空想の生き物と出会った場所を描く。
- ⑧ ⑤でつくった素材を用い空想の生き物を描く。
- ⑨ 描かれた場所に、写真と空想の生き物を配置し貼る。

C 授業実践の内容

第一段階に、教室全体でゆめのなか、空想の世界の理解を行い、イメージの共有化が行われた。第二段階として、空想の世界で出会う生き物をイメージさせた。他者の発言を聞くことで、さらにイメージを具体的にする。第三段階として、空想の生き物と出会ったときの反応を身体表現させ、その生き物の大きさを把握させた。それぞれが向ける目線、体の角度、体重移動によって、生き物の大きさ、存在感を確認することができた。第四段階は、カメラを前に表現を行う。第五段階では、生き物の素材、出会いの場をつくる。最終段階では、全てのパーツが配置され作品となる。

「ゆめのなかへ」というテーマを理解させるために「寝ている時に見るゆめの他に」という教諭の問いかけにより、児童の返答で、「想像」「空想」という言葉が提示された。こ

の時、非現実世界を全員が共有することが行われた。非現実世界と理解されたことで、具体的な空想の生き物が上げられた。「ケンタウロス」、「ユニコーン」、「人が飛ぶ」、「ポケモン」と上がった。イメージはより具体的になり、多数の生徒が各々のイメージを言葉に変え発言していた。このイメージは日常生活で得た情報であり、ひとつの問いかけにより日常生活と美術教育との行き来が行われたことになる。発言の段階では、日常生活における発想と何も変わらないが、このイメージを、次の問いである出会いの場面へと連続させることで、より質的な世界へと変化する。

写真1は、児童による作品例である。画面左側の人物は④で撮影した写真から人物の部分のみを切り取り、貼り付けたものである。画面全体で出会いの空間を描き、想像的な画面が描き出されている。

⑤の、コラージュによって使われる生き物を表す素材をつくる際に、そのイメージは、形、色、質感をとめない生き物を表す素材としてつくられる。写真1の右側にある赤い色をした生き物が、コラージュされた部分にあたる。見たものを再現するための色彩や形ではなく、想像の生き物を表現するための素材をつくることは、頭の中に描かれた生き物の感触や雰囲気をつかむことで、そこに質的なアプローチが生まれると考えられる。そこには、学習指導要領でいう「創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現する」ことが実践されている。



D 授業実践の結果と考察

この実践例では、絵の具と紙媒体を利用しつくられた空想の生き物のための素材と、写真媒体、さらには、出会いの場を描いたものとの三点が構成され配置された。そこには、質的世界の生成が行われたと読み取ることができる。アイスナーは次のように言っている。

媒体を通じて表現の成り立つように質を選び出し構成するという問題は、質的領域における知的な判断の結果である。思考によって媒介されるもの、また、活動の過程で扱われるものが質であり、そして最終的に行きつくものが質的全体、すなわち質を創造し構成することによって表現をともなった美術形態となるのである。¹⁾

イメージされた世界は実際には経験していないが、出会いをイメージすることで、空想の世界をより鮮明にし、想像力を高めることにつながったと考えられる。まさに、言葉が、深層意識より変化し現れた様子がうかがえる。そこには、日常生活と美術の授業とのつながりが生まれ、さらには、その発想が土台となり質的世界のともなった芸術作品が作りだされた。言語表現の視点では、個人個人の経験と、交わされる言葉によってイメージが構築され、頭のなかでより具体的に描きだされたと捉えることができる。しかし、その変化を生徒自身が一時的なものにしないためにも、つまりは生涯にわたって質的な世界を探求できる基盤を築くためには、その変化を自身が知り、理解することで次の作品づくりへの展開が求められる。さらには、日常生活において、衣服や家具などの選択、配置においてこだわりを持つことは、そこに質的世界が存在している。つまりは、図画工作、美術教育で行われる創作活動は、日常を形づくるものであり、将来の生活を豊かにすることへと、連続的につながっているととらえることができる。

そこで、筆者は、児童がより具体的にこの変化を理解し、次の創作へと展開するために、以下の内容を制作過程に記入、もしくは発言させることを想定した。

【最初の段階】

- ①どんな生き物をイメージしましたか？（思いついただけ記入する。）
- ②その生き物にふれると、どんな感じですか？（フワフワしている。ベトベトしている。）

【中盤】

③その生き物をみんなに紹介しましょう。どんな場所では会いましたか？

④どんな工夫をしましたか？ 色について…形について…絵筆の使い方について…

【完成して】

⑤この作品を誰にあげたいですか？

⑥絵の具や色について、描いていて発見したこと、思ったことを書きましょう。

この想定した学習ノートでは、制作における始まりと、中盤、完成の三段階に分け、時間の経過とともに事物と関わりを持ったことで生まれる経験を言語化するものである。言語化することで、感じ、表現したなかに、どのような要素が含まれているのかを具体的にすることが可能となる。つくるうえで言語化し具体的にした内容は、自分、もしくは人の作品の構成要素となる、色、形、構図に対して、その特徴を理解することにつながると考えている。このことが、日常生活においても、作品づくりと変わらない質を伴った視点を持つことにつながる。しかし、反対に言葉では表しきれない感覚や思いがあることも確かである。

あるひとつの事物に対して、自分なりの価値観を持ち、自分なりの表現方法でその思いを伝えることができることは、それが、言語であっても、歌であっても、絵画表現、身体表現であっても、ある一定の質を持つことで新たな形が生まれる。それを形成している一部には、日常生活での経験があり、なんとなく過ごす毎日がある。しかし、表現することは、なんとなく見ていたものを凝視することや、こだわりを持ち特別に扱うこと、そして選びとることにある。デューイは次のように言っている。

一つの経験の内部においては、次々とおこる各部分はその後におこるものへと邪魔されることなく自由に流れこむ。したがって、そこには継ぎ目や空白といったものがない。川は、池とちがって流れている。

後続の部分が以前におこったことをさらに継続するとき、前後どちらの部分もそれじしんの個別性を獲得する。²⁾

川の流れのなかでしか特別なものは生まれず，そこに個性があると考えられる。教諭にはその違いを見つけ，質を高めるための手助けを行うことが求められる。

以上の写真媒体を利用した小学生における図画工作の授業観察の考察から，日常経験，言語，作品表現の関連の中で，質を意識させることの関係性は，次の図 10 のように捉えられる。

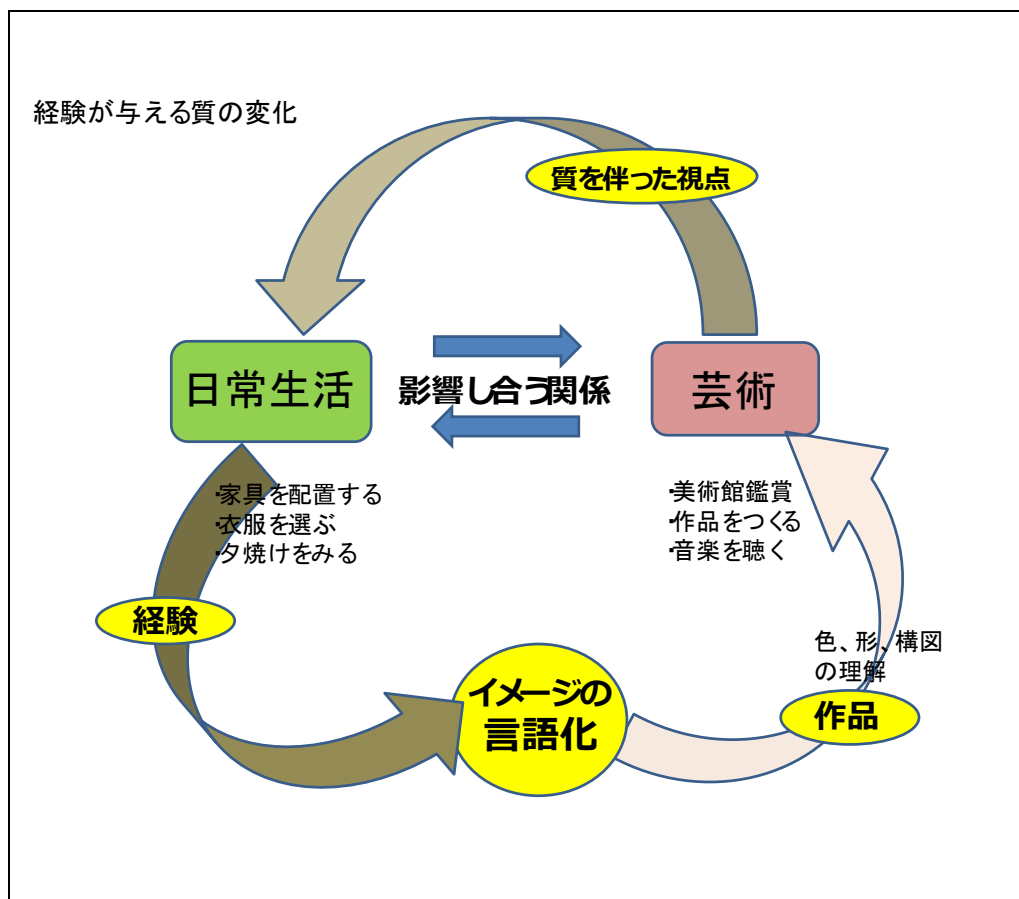


図 10 経験が与える質の変化

図 10 は，日常生活と芸術とをつなぐことで，言葉やイメージの獲得を発生させ，その経験はデューイの言う「川の流れ」を表し，経験と芸術とのつながりを示している。言葉の発生は，日常生活の中で起こる質的経験によって生まれ，深層意識は美術活動にアプローチし，作品を形づくることとなる。また，美術活動の中で発生した質的経験も生活を支えるものであり，その流れは抽象的な事物を言葉が支える役割を担っている。児童が図画工作の授業という一つの環境のなかで，日常生活での経験を表現と結びつけ思考することは，個性を意味し，その人間にしか表現できない内容を形づくることを表している。そして，

他者とのイメージの共有において、経験はより確実なものへと変化し、意味をつくり変えると言える。

授業実践の第一段階として、デジタルカメラを利用した授業の観察を行った。この授業では、デジタルカメラを撮影する撮影者は、本授業担当の教諭であり、小学校第2学年の児童がカメラ機器を持って撮影を行うことはなかった。デジタルカメラに対する認識は、カメラを構える教諭の存在に対し疑問を抱く児童がいなかったことから、授業を行ったクラスの児童は、全員がデジタルカメラの存在を理解していたと言える。さらに、写真撮影時にデジタルカメラを前にポーズをとることにに対し、恥ずかしがることや身体の動きを止める行為から、撮影されるという状況を日常生活においても経験しており、撮影後にどのような状態で自身が映し出されるのか、という想像がついていた、と読み取ることができる。

さらに、印刷された自身が映った写真の切り抜きと空想の世界とを組み合わせ、一つの場面をつくる際に、絵の具による絵画表現と写真をコラージュし同じ画面の中で構成することへの抵抗の有無についてだが、写真の存在を無視したり、空想の世界と写真の図像が極端に関係性を構築できていないなどの内容が見られなかったことから、生徒の写真利用に関しては、問題なく利用可能と判断ができる。しかし、年齢によっては、思春期などで自身の顔を撮影されるといふことに対し、敏感に反応する可能性がある。中学校第1学年を対象にした自画像を描くという内容の授業において、鏡を見るという行為に対し抵抗を感じる、といった生徒が確認できている。自身が写し出されることや、撮影されることによる心の問題は、デジタルカメラを利用した教材を作成する上で、欠かすことのできない問題点として上げることができる。

以上の内容を踏まえ、授業実践を組み立てる。

第2節 デジタルカメラを用いた小学校における図画工作の授業実践2

A 授業実践の概要

本授業実践の目的は、小学生を対象にデジタルカメラを利用し、擬態語で捉えた表情を様々な質感で表現させることで、質感という新しい感覚を意識させることができるか、実践分析を通して明らかにすることである。

授業の概要は、次の通りである。

○題材名：「ことばをうつそう」

○実施年：日時 平成 23 年 3 月 22 日（火曜日）第 1 校時

23 日（水曜日）第 1 校時

○場所 吉野川市立 U 小学校

○学級 第 1 学年（男子女子合計 23 名）

○使用媒体：デジタルカメラを利用する。

○授業者：西園政史

B 授業実践の計画と展開

学習指導案（第 1 学年）（2 時間扱い）

日時 平成 23 年 3 月 22 日（火曜日）第 1 校時

23 日（水曜日）第 1 校時

場所 吉野川市立 U 小学校

学年 第 1 学年（男子女子合計 23 名）

1. 題材名「ことばをうつそう」

2. 題材設定の理由

小学校第 2 学年にあたる時期の児童は、身近にあるいろいろな材料を並べたり、積んだり、何かに見立てて遊んだりする。そこには進んで材料などに働きかけ、そこで見つけたことや感じたことを基に、思考や判断をし、自分の思いの実現を図ろうとする姿がある。

そこで、より素材の特徴をとらえ、実感させるために擬態語を取り入れ、写真撮影をさせる。言葉からのイメージを写真撮影させることで、自分の想像を具現化する体験を行う。フワフワなどの擬態語を友達と共有し写真表現させることで豊かな表現力を養うことにつながる。また、鑑賞、批評によりそれぞれの捉え方の違いによる表現の多様性を感じ、表現の可能性を理解させる。

【教材観】

様々な質感を感じることで、図画工作への強い関心を持たせる。さらには、その質感を利用して表現の幅を広げる。日常生活でよく目にするデジタルカメラを使うことで、写真を利用した作品づくりがより身近なものであることを認識し、創作意欲を引きだす手助けとなる。

【生徒観】

この時期の児童は、身近にあるいろいろな材料を並べたり、積んだり、何かに見立てて遊んだりする。そこには進んで材料などに働きかけ、そこで見つけたことや感じたことを基に、思考や判断をし、自分の思いの実現を図ろうとする姿がある。そのことは、自分の感覚や気持ちを大切にしながらつくることで、新たな発想を生み出す原動力となり、さらに、それを実現するための工夫につながる。さらに、グループで協力することで、友人との関係を築くことができる。

【指導観】

今回の授業では、質感という新しい感覚を育てるため、デジタルカメラを利用することで、日常生活の中にある様々な質感を発見させる。その発見を基に創作へと結びつけることで図画工作への興味、関心を日常的なものとする。グループによる活動を行うことで、協力関係を築くことにつながるよう促す。

3. 指導目標

- ①鑑賞，批評し合うことで表現の違いを知り，互いの意欲を高め合う。【関心・意欲・態度】
- ②身のまわりのものに対し，日常とは異なる視点を持ち，豊かな発想で質感の違いを見つけ提示する。【発想・構想】
- ③デジタルカメラを利用し，擬態語で捉えた表情を様々な質感で表現する。また，独創性のみを重要視するのではなく，他の児童に伝えることも意識する。【技能・表現】
- ④発見という視点を持ち，自由にデジタルカメラを利用できる。日常の場にある様々なものを質感として捉えることができる。【知識・理解】

4. 指導計画（全2時間）

第1時 カメラの使い方，擬態語の説明をし撮影を行う。

第2時 撮影した写真をみて，新たな発見をする。全員で撮影したものをモニターで鑑賞，批評する。

5. 第1時の目標と展開

(1) 第1時の目標

- ① カメラの使用方法を伝え、「うつす」ことを理解させる。
- ② 興味関心を持ち題材に取り組み、擬態語の理解とグループ内におけるイメージの意見交換で豊かな発想を出し合う。
- ③ グループでの撮影により、協力しながら新たな質感を発見し出会う。

(2) 準備

〈教諭〉 グループで一台のカメラ，学習ノート

〈生徒〉 筆記用具

(3) 第1時の展開

展 開	時 間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導 入	5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ（自己紹介） ・本時の内容を説明する 「今日と明日で、皆さんにはカメラを使って探検をしてもらいます。まずこちらを見てください。」 ・黒板に書かれた「ごつごつ」から連想されることは何か質問し，答えさせる ・複数回答が出たら参考となる写真を例示する 「先生は、ごつごつという言葉からこのような写真を撮りました」 	<ul style="list-style-type: none"> ・席につき説明を聞く ・「ごつごつ」から連想されることをイメージし答える ・写真と言葉のつながりを理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が席に着くことを確認する ・説明時に，イメージが固定化されないよう注意する

<p>展 開 I</p>	<p>10 分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに、言葉の書かれたカードと学習ノートを配付する ・名前と言葉を記入させる ・個人で、言葉を見て感じたことを記入させる ・5分間、グループ内でその言葉から受けるイメージについて意見交換させ、記入させる ・以下の注意点を伝える ○グループでイメージしたものをもとに、学校内で撮影するものを探し、良いと感じたものがあったら、4人で同じものを色々な角度で撮影すること ○触れる、音を聞く、動かすなどし、視覚以外で感じることも意識すること ○撮影枚数は一人1枚とし、グループで計4枚とすること ・カメラをグループに1台貸し出すと同時にカメラ番号を学習ノートに記入させる ・黒板を使いカメラの使い方を説明する <p>「では、まず電源を入れてみましょう。次にモニター画面を見ながらシャッターボタンを押してみましょう。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉カード、学習ノートを受け取る ・名前と言葉を記入する ・個人で、言葉を見て感じたことを記入する ・5分間、グループ（4人1グループ）内で、用意された言葉のイメージについて意見交換し、色々なイメージを持つ ・注意点を聞く ・グループで1台のカメラを受け取る ・カメラ番号を記入する ・カメラの使い方を聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由な発想で、言葉から受ける印象から意見交換できているか確認する ・話し合いが止まってしまっているグループに対しては、例えとして身近にある物に触れたときの感覚を言葉にさせる ・言葉は、「つるつる、ざらざら、ふわふわ、ぐちゃぐちゃ」とする ・カメラの取扱について、しっかりと理解させる（撮影、プレビュー）
----------------------	-----------------	--	---	---

		<ul style="list-style-type: none"> ・走らない, カメラは水につけない, 落とさない, やさしく扱うなどの注意する点を伝える ・教室に集合する時間を伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・時計を見て時間を確認する 	
展開 II	20分	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内(校庭, 校舎内)で写真撮影をさせる(雨の場合は校舎内のみとする) 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内で, 言葉からイメージされるものを撮影する ・色々なところに目をやり, 視線の角度を変えるなどし幅広く探す 	<ul style="list-style-type: none"> ・校舎, 校庭で撮影させる ・雨の場合は校舎内のみとする ・一か所にとどまらずに, 視点を上下させたりし, 観察させる ・触れる, 音を聞く, 動かすなどし, 視覚以外の感覚を使い質感を感じるように伝える ・時間内に教室にもどるよう促す
まとめ	10分	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタルカメラで, 撮影してきた写真を確認させる ・カメラ, 学習ノートを回収する ・次の授業内容を伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・撮影してきたものを確認する ・カメラ, 学習ノートを提出 ・次の授業内容を聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・戻ったグループごとに撮影出来ているか確認する ・すべてのカメラ, 学習ノートの回収を確認する

(4) 第1時の評価

- ①カメラの使用方法を伝え, 「うつす」ことを理解できたか。
- ②興味関心を持ち題材に取り組み, 擬態語の理解とグループ内におけるイメージの意見交換で豊かな発想を出し合えたか。
- ③グループでの撮影により, 協力しながら新たな質感を発見し出会えたか。

・ 第2時の目標と展開

(1) 第2時の目標

- ①自分たちで撮影した写真をグループ内でみて、気がついた点を伝え合う。
- ②与えられた言葉がもっとも良く表現されている写真を選択する。
- ③学習ノートの記入と、批評を行うことにより自他のグループの作品意図を理解し、表現の良さや個性による違いを感じとる。

(2) 準備

〈教諭〉 生徒が撮影した写真を印刷したもの、学習ノート、モニター

〈生徒〉 筆記用具

(3) 第2時の展開

展 開	時 間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導 入	5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の授業を振り返る ・再度、題材のねらいを伝える ・本時の流れを理解させる ・各グループに、自分たちで撮影した写真の印刷されたものを配付する 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回までの内容を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・題材を再度理解させる
展 開 I	20 分	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで、印刷された写真を見ながら言葉のイメージが表現されたか確認させる ・グループ内で4枚の写真からもっとも擬態語を表現されていると感じるものを1枚選ばせる ・グループごとにテレビモニターに撮影した写真を映し、 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で4枚の写真からもっとも擬態語を表現できたと感じるものを1枚選ぶ ・他のグループの写真を見て、どのような擬態語が当てはまるか思考し答える 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で自由な意見交換が行われていることを確認する ・写真を読み解くことをさせる ・様々な考え方があることを理解さ

		他の生徒にどのような擬態語なのか答えさせる ・その写真からどのような印象を受けたか答えさせる		せる
展開Ⅱ	15分	・例で出した写真を示し、色や形について質問し答えさせる ・各グループの選択した写真にどんな色や形があるか学習ノートに記録させる ・気がついたことを記入させる	・写真に写っている色や形について思考し、記入する ・気がついたことを記入する	・色や形について視点を持たせる
まとめ	5分	・授業のまとめをする 「普段何気なく見ていたものも、少し違った視点や、意識して見てあげること不思議な世界が発見できましたね。」	・話を聞く	・日常的に面白い視点、豊かな世界を発見する喜びを伝える

第2時の評価

- ①自分たちで撮影した写真をグループ内でみて、気がついた点を伝え合えたか。
- ②与えられた言葉がもっとも良く表現されている写真を選択できたか。
- ③学習ノートの記入と、批評を行うことにより自他のグループの作品意図を理解し、表現の良さや個性による違いを感じとれたか。

C 授業実践の分析と考察

本授業実践は、小学校第1学年を対象に行った。内容としては、擬態語を用いて、その言葉の印象をグループ内で共有し、デジタルカメラを媒介させ写真作品として制作を行う。

指導過程で児童と擬態語との出会いによる反応について、一つのグループの一場面を分

析したものが表6である。本授業実践のビデオ記録をもとに分析を行う。

授業記録は、撮影スタッフ1名がビデオカメラを持ち、筆者が行う授業を撮影する。撮影スタッフによる記録は、授業の始まりから終わりまで一つのグループを撮影し続けている。その他に教室全体が撮影できるように定点カメラを一台設置し撮影した。合計2台のビデオカメラを使用し授業記録を行った。

表6 小学校第1学年一擬態語と出会いによる反応

発言者	発話	行為
筆者	「ご・・・つ・・・。」	・黒板にゆっくりと「ご」, 「つ」と言いながら書く
児童A	「ごっごっ。」	・2文字書いた時点で発言
筆者	「ごっごっ。」	・黒板に「ごっごっ」と書く
児童数名	「ごっごっ。」	・数名が同時に発言
児童A	「あたった。」	・2文字の時点で回答したことに対する発言
児童B	「ごっごっ あたまでごっつんごっつん。」	・頭を前後に振りながら発言
筆者	「ごっごっつって聞いて、みんなどう思う？」	・クラス全体に問う
児童C	「おもろい。」	
児童A	「がりがりってかんじ。」	・各々が発言をする
児童D	「きんぐまん。」	
筆者	「きんぐまん？」	・児童Dに聞き返す
筆者	「堅そうとか、柔らかそうとか。」	・クラス全体に問う
児童E	「いし。」	・小さな声で、筆者の質問の語尾に重ねて発言
児童E	「いし。」	・先ほどより声を大きく出し、同じ内容を発言
児童A	「ごっちんごっちんかたいなー。」	・歌を歌うようにリズムを取りながら発言

筆者	「堅そうだね。」	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス全体に伝える ・各々が発言をする
児童 F	「じやりじやりいし。」	
児童 G	「ねりけしとか?」	
児童 H	「がりがりくん。」	
児童 H	「ぜったい がりがりくん。」	

課題を行うにあたりまず始めに、黒板に擬態語の「ごつごつ」を書き示し、言葉から受ける印象を確認する。一文字ずつゆっくりと書き、児童の反応をうかがう。その際、「ご」「つ」と書いた時点で、児童 A から「ごつごつ。」と発言があり、「ごつごつ」と四文字書ききった時点で、クラス全体に言葉<擬態語>の共有が行われる。擬態語の「ごつごつ」がクラス全体で共有され、児童それぞれの中にこれまで得た「ごつごつ」の経験が想起され、筆者の問いに対し様々な発言があった。児童 C は「おもしろい。」と発言し、言葉の響きからくる印象を答えている。児童 A は、「がりがりってかんじ。」と発言し、「ごつごつ」に類似した印象を受ける言葉をイメージしている。児童 D は、「きんぐまん。」というキャラクターを思わせる発言をしている。児童からのいくつかの発言の後に、筆者から「堅そうとか、柔らかそうとか。」という問いかけに対し、児童 E は、筆者のこの発言の語尾に重ねながら「いし。」と発言する。「いし」は、おそらく「石」を示す発言であったと推測できる。この発言を受け、児童 A は、「ごっちんごっちんかたいなー。」と、歌を歌うようにリズムを取りながら発言している。この発言は、児童 E による石の発言を受け、イメージの共有が行われたことが推測される。「ごっちんごっちん」とは石と石がぶつかる際に発生する音を想起させ、生徒 A は、過去の経験から擬態語「ごつごつ」のイメージを周囲との共有によってより具体的にしていることが推測される。

続いて、筆者の「堅そうだね。」という発言に対し、児童 F は「じやりじやりいし。」と発言している。児童 E と同様におそらく「石」をイメージした発言であることが推測できる。しかし、児童 F は、より特定された「じゅりじやり」という要素を含み発言している。「ごっちんごっちんかたいなー。」という児童 A の発言を聞いていることが推測されることから、児童 F はより具体的な発言内容に至ったと推測される。児童 H は、「がりがりくん。」というおそらく食品のアイスの名前と思われる発言をする。このアイスを食べた際の食感をイメージしたことがうかがえる。

この発話から、美術教育における擬態語を利用することの重要性を提示する。




- ① 「ごつごつ」という擬態語について、説明をせずとも児童はその言葉から受ける印象を想起し、発言している。
- ② 擬態語から受ける印象は、「ごつごつ」という一語であるが、そこから受ける印象は、複数の異なるイメージとなって発言に至っている。
- ③ 自由な発言の場であったことで、他の児童の発言を聞き発言するなど、イメージの共有が行われている。
- ④ 音の響きや食感などを推測させる発言から、児童は、五感によって得られた過去の経験と「ごつごつ」という擬態語とを結びつけ、頭の中にイメージをつくり、その経験を基に発言にいたっていることが推測される。

①に関しては、擬態語が学年を問わず共通に認識可能な言語であることを示唆している。つまり、小学校から高等学校にかけ、共通認識を築くことが可能であることから、美術科教育で活用することに意義があると捉えることができる。さらに、②で述べているように、言葉には、環境、状況、個人の想いによって、意味は多様性を含み、言葉の広がりがあることが認識される。そして、③で述べている様に、児童それぞれの発言は、「ごつごつ」という一つの言葉から複数のイメージが発生し共有され、イメージの差異が発生していると言える。各々が頭に浮かべたイメージに対し、他の児童の発言が耳から入り、それが「ごつごつ」のイメージ構築の一要素となっている。差異は、自身のイメージをより具体的なものとするために、欠かすことのできない役割を担っている、と言える。

原始より続くとされる「質感」とのつながりを築く擬態語は、④で述べているように、児童の日常生活を含めた全ての経験に問いかけを行い、美術を介した表現の際に擬態語との結びつきによってイメージの想起が可能となる。日常生活と学校における学びとをつなぐことは、学校教育が生活を豊かにするための役割を担っていることを認識させる意味で重要な内容となる。

続いて、擬態語から感受した質感をデジタルカメラで撮影する行動を分析したものが、次の表7である。

表7 グループによる活動

状況写真	発話	行為
 <p>写真 2</p>	<p>女兒 I「まっすぐかおして。」 女兒 I「まっすぐかおして へんなの。」</p>	<p>「つるつる」という擬態語に対し、窓ガラスを想定し、ガラスに顔を押し付ける児童が撮影対象となり、撮影を行う。</p>
 <p>写真 3</p>	<p>男児 J「みせて。」 女兒 I「もういっかいとらせて。」 男児 J:「みせて。」 男児 K:「みせてや。」</p>	<p>撮影した内容を、撮影者と撮影された児童とで確認を行う。撮影されたイメージを共有することで、次のイメージへのアプローチが発生する。</p>
 <p>写真 4</p>	<p>女兒 I:「へんなかおするな まっすぐ。」 女兒 I:「まっすぐ。」 男児 J:「はい。」</p>	<p>再度、撮影イメージを伝え、デジタルカメラに備わっている液晶で理想の構図を探っている。表情を工夫し、撮られる側と撮る側とがイメージの共有を行っている。</p>

このグループに与えられた擬態語は「つるつる」である。「つるつる」という擬態語に対し、グループで決定した撮影対象は、「ガラス」であることが学習ノートから確認できる。

女兒 I は、グループの中で一番目に撮影を行っていた。女兒 I は、デジタルカメラを持ち、教室の外にあたる部分から、教室の内側を撮影する位置についた。全面が窓になっている扉越しに撮影が行われた。男児 J と男児 K は、ガラスに顔を押しあて、歪ませること

で、顔に表情をつくっている。それに対し、女兒Ⅰは、「まっすぐ。」と二人に伝え、顔の正面から撮影することを試みる。女兒Ⅰは、続いて行った2枚目の撮影においても、「まっすぐ。」と伝えている。



写真 5



写真 6

図 11 女兒Ⅰによって撮影された写真

表 8 ガラスの特性を観察する行為




状況写真	発話	行為
 <p>写真 7</p>	(なし)	<p>女兒と同様のカメラポジションで撮影を行う。</p>
 <p>写真 8</p>	(なし)	<p>窓ガラスにより近づき、撮影対象の一部をクローズアップするように撮影を行う。窓ガラスの存在によって、撮影ポジションが決定している。</p>
 <p>写真 9</p>	(なし)	<p>写真中央の柱の後ろで、撮影対象となっていた児童は撮影せず、窓ガラスに反射する自分を撮影している。</p>

写真7には、男児Jと男児Kの顔と、扉のフレーム、反射によって映り込む木など外の風景が映し出されている。女兒Iの思考には、顔がガラス扉に押し付けられ歪むことによって、ガラスの存在を認識したことと、そのことによって顔の表情に変化が生まれたことが、強く意識されていたと読み取ることができる。このことは、女兒Iが、何度か伝えている「まっすぐ。」という発言に象徴されている。顔を正面に位置することで、唇と鼻がガラスによって平らに押しつぶされ、潰れたように見える。透明なガラスによってつくられる新たな表情は、撮影を行うという状況において、撮影者と撮影される側のやり取りにおいて表情を探るという、質的な経験が行われたと言える。このことは、学校での学びという環境下で、グループ活動を行うという状況において発生した質的な経験だと捉えることができる。

男児Kは、女兒Iと同じ位置で撮影を試みるが、女兒Iと男児Jの表情を見て、撮影対象との距離を変更する。写真5から読み取れるように、カメラと撮影対象との距離は10センチメートル程度である。このことは、撮影された写真から解るように、鼻の穴にクローズアップするように撮影されている。カメラの性能の問題で、撮影距離が短すぎたことでピントが合わずにぼけた写真となっている。男児Kにとって、顔という全体から鼻の穴という部分に興味を示し、撮影を試みたことが読み取れる。顔全体の表情から部分に視点を移し、撮影を行うことは、撮影場所の空間を把握し、自身の身体を移動することで、新たな撮影ポジションを確保し、デジタルカメラの液晶モニターでその瞬間に起こる構図、表現としての面白さを確認したと推測できる。

写真11では、撮影対象を人物ではなく、ガラスそのものに反射する自分を撮影している。このことは、人物を撮影している際に、人物と自分との間にあるガラスに発生する映り込む現象を体験したことにより、興味が発生したことが読み取れる。半分は教室の中の様子が見え、半分は自身が映る現象は、人物の表情とは異なる質を持ち、作品へと反映された。

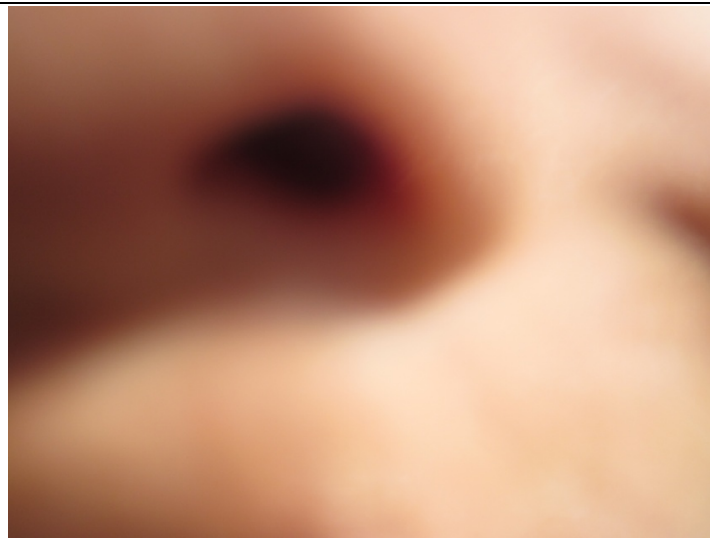


写真 10



写真 11

図 12 男児 K によって撮影された写真

D 授業実践より得られた成果

本授業実践では、小学生を対象にデジタルカメラを利用し、擬態語で捉えた表情を様々な質感で表現させることで、質感という新しい感覚を意識させることができるか、実践分析を行った。実践を行った児童は、小学校第1学年という年齢にありながらも、擬態語に含まれる表情をしっかりと読み取り、写真で撮影していた。擬態語から感じられる質感は、言葉を覚え始めた幼児から大人までが共通に認識できる要素を含んでおり、そこには、事

物の持つ「感じ」を認識するための大きな役割が内在している。そして、デジタルカメラは、その感受内容を感じとった瞬間に直接反映できることが、観察の中より読み取れる。今、ここで起こっている現象が、どのような質感を含んでいるのかを明確にしながらか作品制作を行う経験は、抽象的な事物を扱う美術表現にとって、表現の具体化や表出につながる役割を担っている。つまり、擬態語は、このような経験を発生させ、デジタルカメラによって具体的に対象とのつながりを構築し、美術表現活動の明確化が行われることとなる。

さらに、重要なことが、この経験の際に、他者と意見交換を行っている点である。イメージの構築のための意見交換は、擬態語から受けた感覚による交換であり、抽象的な互いのイメージの伝え合いによって取捨選択が行われ、作品が形づくられている。この経験は、美術教育に留まることなく、生活において感じたことを言語化することに反映されると考えている。

本授業実践では、擬態語から新たな感覚を意識させ、質感の感受が行われていたことが確認できた。さらに、デジタルカメラは、感受した質感を具体化し美術表現として提示し、作品として成立させていた。質感の微細な差異を認識するために、他者の存在が大きな役割を果たしていたことが確認できた。図13は、自身と他者、自身と外界との関係によって体験が発生する場面を示したものである。

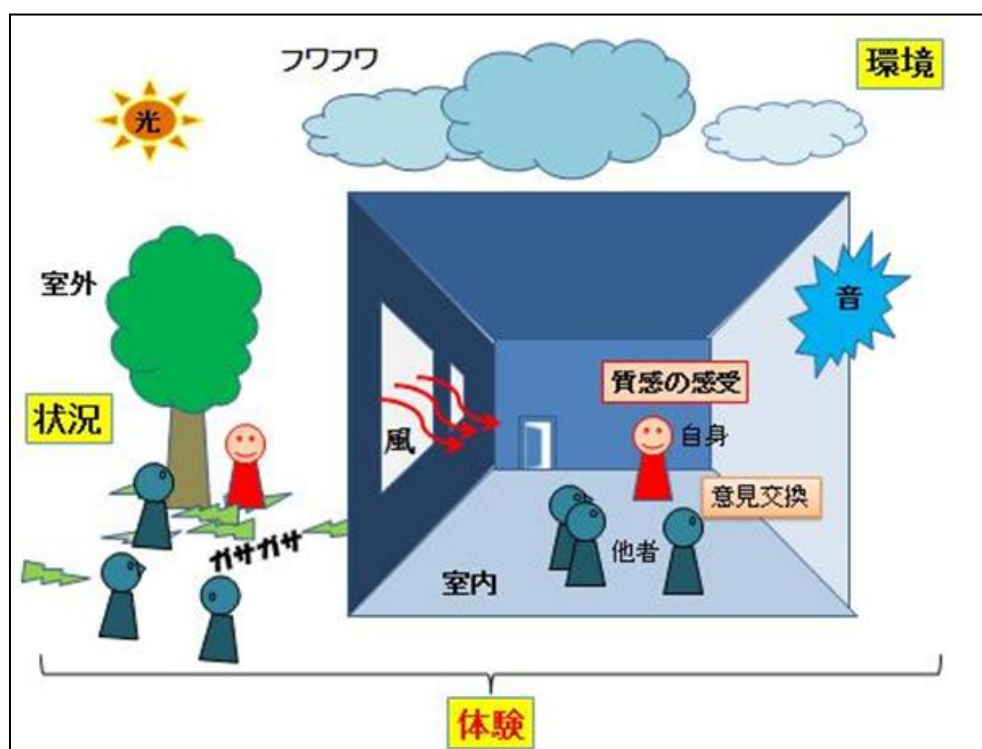


図13 環境と状況によって発生する体験

(がくしゅうノート)

『ことばをうつそう』

【3月22日・火ようび】

ねん | くみ なまえ

<p>① カードにかいてあることばを、かきうつしましょう。</p> <p>「<u>デジタル</u> <u>かんじ</u>」</p>	<p>② カメラのばんごう。</p>
<p>③ カードにかいてあることばから、かんじたことをかきましよう。</p> <p>デジタル かんじ いではこが あぶるかんじ かつくえかする</p>	<p>④ グループではなしあったことをかきましよう。</p> <p>ガ ラ ス</p>

【3月23日・水ようび】

<p>⑤ シャシんには、どのようないろやかたちがありますか？</p> <p>白(しろ)と(こ)い 青(あお)くろ きいろ</p>	<p>⑥ シャシんをみて、かんじたことをかきましよう</p> <p>しやしんてとた ときあぐちや ぐちやだつた けしきざらざ らにみえた。</p>
--	---

図 14 生徒により学習の記録 (学習ノート)

(がくしゅうノート)

『ことばをうつそう』

1ねん 2くみ なまえ

【8月22日・火ようび】

① カードにかいてあることばを、かきうつしましょう。 「 <u>つるつる</u> 」	② カメラのぼんご。 6
③ カードにかいてあることばから、かんじたことをかきましょう。 ① けっ ② おはたけ ③ くさ	④ グループではなしかつたことをかきましょう。 けつ

【8月23日・水ようび】

⑤ シャシんには、どのような <u>いろやかたち</u> がありますか？ とうめい まる	⑥ シャシんをみて、かんじたことをかきましょう。 とうめいでいよも しろかったていす
--	--

図 15 生徒により学習の記録 (学習ノート)

生徒に配付した学習ノートの記入項目は、以下の6項目となる。

- ①カードにかいてあることばを、かきうつしましょう。
- ②カメラのばんごう。
- ③カードにかいてあることばから、かんじたことをかきましょう。
- ④グループではなしあったことをかきましょう。
- ⑤しゃしんには、どのようないろやかたちがありますか？
- ⑥しゃしんをみて。かんじたことをかきましょう。

①から④は、授業1日目に記入し、⑤と⑥は、2日目に記入を行った。

1日目の記入項目①から④は、デジタルカメラで撮影を行う前に記入した内容である。2日目の記入項目⑤と⑥は、撮影した写真を印刷したものを鑑賞した際に記入した内容である。

①には、各グループに配られる擬態語の書かれたカードの言葉を記入させた。②には、使用するデジタルカメラに記載されている番号を記入させた。③には、カードに書かれた擬態語から、個々人が感じたことを記入させた。④には、グループ内で行った意見交換の内容を記入させた。⑤には、自身が撮影した写真に写り込んでいる形や色を発見させ記入させた。⑥には、写真を観て感じた事を自由に記入させた。

図14、図15、図16は、同じグループの3名（男児J・男児K・女児I）の学習ノートである。学習ノートの③の記入を見ると、児童は各々「つつる」という擬態語に対し、様々な物、または状況を感じ取り記入していることが読み取れる。児童のこれまでの経験の中から、つつるする素材や状況が思い起こされ記入に至ったと言える。このことは、これまでに得た質感の感受が経験として各々の中に存在することによって、想起可能にさせている。児童それぞれがつくる美術作品が異なる質を生むのは、この経験の違いにあると言える。学習ノートは、児童自身が何を感じ、どの様な視点を持ったのかを具体的にさせる役割を担っている。色や形、質感といった抽象的な要素によって構成される美術作品は、学習ノートや擬態語の利用によって言語化され、美術作品の持つ性質を具体的に認識することにつながる。

2日目の記入項目⑤では、写真から感じられる色や形に関する様々な要素が記入されている。自分自身が撮影した写真の中に映り込む造形要素を性質ごとに具体化することで、言葉と質感との結びつきをさらに認識することにつながる。